

近世アジアの皮革 6. 日本の皮革貿易

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

894年の遣唐使の廃止以降、唐との国交はなかったが、中国の商船による私的貿易が続けられ、宋の時代すなわち平安末期には盛んになった。輸入品としては絹織物・書籍・香料・宋銭（銅）等があり、輸出品としては金・硫黄・刀剣・漆等があった。15世紀には国交成立により日明貿易や日鮮貿易が行われた。1543年（天文12）ポルトガル船の種子島漂着、1549年（天文18）宣教師ザビエルの渡来以降、ポルトガル船による南蛮貿易が盛んになった。朱印船貿易は1592年（文禄1）に秀吉が東南アジアへの渡航船に朱印状を発行したことに始まったとされ、1633年（寛永10）の家光の鎖国令によって終了した。この時代には主に生糸・絹織物・綿織物・鹿皮・蘇芳^{すおう}・砂糖等が輸入され、銀・銅・鉄・樟脳・扇子等が輸出された。島原の乱を口実として、1639年（寛永16）にポルトガル人が追放され、1641年（寛永18）には鎖国体制が確立され、貿易は幕府の統制下におかれ、長崎においてオランダと中国の2国のみと行われ、さらに朝鮮と琉球はそれぞれ対馬と薩摩を通じて行われ、この体制は以降約200年間続いた。

2. 輸入品

朱印船とオランダ船、唐船での交易において、皮革類としては主に鹿皮と鮫皮の輸

入が挙げられる。16世紀末では鹿皮は主にマニラから多く輸入され、17世紀には主に暹羅^{シヤム}（タイの旧称）や台湾から輸入されていた。シヤムでは鹿皮と鮫皮は蘇芳（赤色系の染料）とならんで主力商品であった。シヤムの都アユタヤには日本人町があり、彼らが貿易に関わり鹿皮を日本に送っていた。アユタヤのオランダ商館員や東インド総督らの記録等では、鹿皮が1613年と1624年、1625年にそれぞれ12万枚と16万枚、25万枚、さらに1634年に鹿皮6,7万枚と鮫皮1万5千から2万枚が日本に送られていた^{1, 2)}。1624年に中国商人からの生糸や絹織物を求めて台湾に行った船が鹿皮18,000枚を積んで帰ってきた。1634年に交趾シナ^{コウシ}（インドシナのトンキン・ハノイ地方の旧称）から鹿皮と鮫皮それぞれ1万枚と1万2千枚が日本に送られていた。鹿皮や鮫皮は柬埔寨^{カンボジア}や太泥^{バタニ}・六昆^{リゴール}（共にタイのマレー半島中部東海岸）等からも輸入されていた。1636年頃の日本のオランダ商館長報告では、年々鹿皮2万枚と鮫皮1万枚が輸入されていたとある³⁾。

鎖国体制が確立した頃の「オランダ商館日記」に示された江戸前期の皮の年間輸入量は表1のとおりである⁴⁾。1641～50年の間で、43年は綸子^{りんず}や緞子^{どんす}の絹織物や麻布、羅紗^{らしや}等種々の輸入品があるが、皮類は無い。47年は入船の記録が無い。鹿皮は1644, 46, 48, 49年には年間数万枚と多

表1 江戸前期の皮革の輸入

年 度	鹿 皮	大鹿皮	山馬皮	牛 皮	鯨 皮	その他
1641 (寛永18)	43,600			2,080	3,700	水牛皮 100 虎皮 8
1642 (寛永19)	164,825		10,151		21,407	水牛皮 649
1643 (寛永20)						
1644 (正保1)	62,132		5,700		16,331	羊皮 5,702
1645 (正保2)	23,430		2,300	4,682	13,200	虎皮 6
1646 (正保3)	53,640	630		4,806	13,601	虎皮 8 犀皮 100斤
1647 (正保4)						
1648 (慶安1)	54,000	4,200		10,500	4,750	中国金色革 200
1649 (慶安2)	60,767	13,970		15,774	7,967	羊皮 7,300 鞣し皮 372
1650 (慶安3)	38,773	9,700		4,390	8,140	

単位：枚。

「唐船輸出入品数量一覧」より作成⁴⁾。

量に輸入されている。さらに48年から50年には大鹿皮も約4千枚から1万4千枚輸入されている。牛皮は1645～50年では年間4千枚から1万6千枚である。羊皮は44年と49年にそれぞれ6千枚と7千枚である。鯨皮は42年が2万1千枚、45年と46年が1万3,4千枚、49年と50年が約8千枚である。珍しい皮として虎皮と犀皮が少量ある。犀皮は重さが単位となっている。中国金色革と鞣し革が48年と49年にそれぞれ200枚と372枚ある。

1650年代以降も鹿皮、牛皮、鯨皮は多量に輸入された。鹿皮は1661～63年(寛文1～3)の間に33万枚輸入されている。鞣し皮も輸入されており、各種鞣し皮(1658年429枚)、広南鞣し皮(1652～53年300枚)、ペルシア革(1657年340枚、1661～62年420枚)、スペイン革(1659～60年822枚)がある。1679～80年(延宝7～8)には中国黒鞣し皮が4,278枚と多量に輸入されている。

1709～14年(宝永6～正徳4)の唐船とオランダ船による貿易は長崎奉行を通じて幕府に報告されていたが、現存していない帳簿があり、年間の統計は明確でない。各船や何艘分かの記録があり、例えば1709

年のオランダ船4艘分の記録には、山馬鹿皮11,673枚、鹿皮13,480枚、麂鹿皮1,161枚、牛皮1,458枚、ハルシア(ペルシアの訛り)革3,039枚、柄鯨26,440本とある⁵⁾。また1711年(正徳1)の唐船(寧波出し)には、牛皮7枚、青皮121枚、他の唐船(シャム出し)では、山馬鹿皮3,948枚、大撰鹿皮2,246枚、中撰鹿皮4,568枚、麂鹿皮3,288枚、みどり鹿皮1,556枚、象皮240斤、虎皮2枚、牛皮1,452枚、柄鯨4,984本である。この年の長崎に入港した54艘分(唐蛮貨物帳と長崎御用留所収唐蛮貨物帳の集計)の皮革輸入量は山馬鹿皮13,863枚、大撰鹿皮6,379枚、中撰鹿皮14,493枚、麂鹿皮28,981枚、みどり鹿皮3,891枚、牛皮5,391枚、ハルシア革767枚、す(素)皮121枚、蛇皮2枚、虎皮10枚、熊皮1枚、象皮240斤、鞣鯨1,083枚、柄鯨10,839枚、海子鯨700本であった^{5,6)}。翌年のシャム出し船では、山馬鹿皮8,019枚、大撰鹿皮1,716枚、中撰鹿皮3,009枚、みどり鹿皮1,660枚、麂鹿皮8,956枚、牛皮1,185枚、虎皮3枚、犀皮80斤とある。シャムからは大量の鹿類の皮が輸入されていた。数量は少ないが、豹皮や羊皮、にく(羚羊)皮等も輸入された。

1740年代の輸入量を表2に示す⁴⁾。数量は船の到着した日付ではなく、記述した日付に基づくので、正確な年間の数字ではない。鹿皮の輸入量は1700年代に入り極端に減少し、1740年代では、多くても1万枚くらいとなった。牛皮と鮫皮も同様に減少した。1770年頃から鹿類の皮や牛皮の輸入はほとんど無くなったが、鮫皮の輸入は江戸時代後期まで続いた(表3)⁴⁾。1810年代には、赤牛皮4,413枚、黒牛皮10,761枚、色

皮2,450枚、赤皮3,117枚が輸入されている。これらは染色された革である。

鹿は日本各地に生息しており、鹿皮・鹿革は古代より諸国からの主な貢納物の一つに数えられていた。それにもかかわらず江戸時代の初期から中頃までは鹿の類の皮が多量に輸入されていた。「和漢三才図会」では、山馬は野馬とも書き、馬に似ているが小さいとある⁷⁾。麂くじかは麂くじか(俗にみどりと呼ぶ)の類であるが、それより小さく、

表2 江戸中期の皮革の輸入

年 度	鹿 皮	山馬皮	牛 皮	水牛皮	羊 皮	鮫 皮	そ の 他
1741 (寛保1)	1,204		120	78		2,866	
1742 (寛保2)	11,283	300	488	100	112	7,913	
1743 (寛保3)	2,692			70		703	
1744 (延享1)	790		246			4,314	
1745 (延享2)	3,724		409	287		2,490	
1746 (延享3)							犀皮 90
1747 (延享4)	5,230		2,400			1,032	虎皮 2 犀皮 30
1748 (寛延1)							
1749 (寛延2)	50		20				犀皮 90斤
1750 (寛延3)	860					236	

単位：枚。

「唐船輸出入品数量一覧」より作成⁴⁾。

表3 江戸後期の皮革の輸入

年 度	鹿 皮	赤牛皮	黒牛皮	羊 皮	鮫 皮	そ の 他
1811 (文化8)					4,127	
1812 (文化9)				1,200	8,996	
1813 (文化10)						
1814 (文化11)		4,413	10,761		212	
1815 (文化12)					5,470	色皮 1,500
1816 (文化13)	661					虎皮 59
1817 (文化14)						
1818 (文政1)					2,863	
1819 (文政2)						色皮 950
1820 (文政4)					4,400	赤皮 3,117

単位：枚。

「唐船輸出入品数量一覧」より作成⁴⁾。

麋は鹿より小さい。大鹿（麋）は子牛くらいおおじかの大きさである。大撰鹿皮は大きくて品質の良い皮を示す。江戸中期大坂で発行された「装剣奇賞」によると、麋皮は小様で、山馬皮はやや大ぶりとある⁸⁾。水牛皮おおしぼは大紋で真っ黒であり、大きさが長さ1間半、巾4尺余である。象皮は色黒くて、厚さ2寸位で、紋が大で粗い。虎皮は中国の雲南とカンボジアで産出し、大きいもので1貫7、8百目、小さいもので5、6百目である。虎皮は唐皮からかわとも称せられた。豹皮はチョウシユウ洮州（甘肅省西南部）または湖広（湖北・湖南省）で産出した。羊皮は西インド産のものが良い。青皮は犀せいひの皮または咽皮のどかわであるが、商家では蛮産の大亀の咽皮くさぜいひと言われていた。なお朝鮮の大亀の咽皮を臭青皮と称した。

輸入した革の種類としては、前述のごとくペルシア革、スペイン革、中国金色革がある。ペルシア革の中には、色ペルシア革、黒ペルシア革、赤ペルシア革と記されているものがあり、染色されていたことを示している。「装剣奇賞」によると、さらに輸入した時期によって、室町時代あるいはそれ以前の古渡こわたり、江戸初期の中渡なかわたり、江戸中期の新渡しんとに区別している。百爾齋ハルシヤ亜すなわちペルシア革には黒・黄・紅・緑・赭の5色があり、五色革とも称した。この革の古渡は艶が無いが、色落ちしなく品質が良く、一方中渡は艶があるが、色落ちし易い。このペルシア革に粒状突起があるかないかは記されておらず、シャグリーン革かどうかは不明である。紋百爾齋モンハルシヤ亜や黒百爾齋亜は和製のものである。スペイン革は世界的に名声を博したコルドバ革も含めいろいろな革があるが、主として山羊皮を明礬あるいはウルシ属のスマックで鞣し、染色した革である。

「唐船輸出入品数量一覧」には見当たらず

ないが、「装剣奇賞」にはインデヤ印度垂（印度垂）、モウル莫臥爾、ウスコウベヤウスコウベヤ、セントメ聖多黙、ベンガラ榜葛刺革、ルソン呂宋革、南京絵革、琉球絵革と称する地名の付いた革がある⁸⁾。これらは輸出品目の鞣し皮に相当するのであろう。インデヤは南天竺または印度とも称し、モウルはインド南部、ベンガラはインド東北部、サントメはインドの南東部コロマンデル地方の地域であり、ルソンはフィリピン群島の一つである。ウスコウベヤは江戸時代のモスクワの呼称である。インデヤにはさらにアマカハ亜媽港（マカオ）や交趾の地名ならびに鼠などの色を示す語を頭に付けた革がある。マカオの物は紋細かく真っ黒で最上であり、大きさは長さ3尺余で、巾2尺余である。かなぼん鉄印で紋を打ち出した物を紋印度垂モンインデヤと称した。これらの輸入革を総じて印伝革いんでんと称した。国内で印伝革を模して種々の革を製造した。紋印度垂も模した。七宝印度垂は紋印度垂を彩色したものであり、大阪伏見町の筒乱屋四郎が模造した。日本の伝統的な革と称せられる甲州印伝革は鹿皮を脳漿で鞣し、次いで燻煙をし、さらに漆付けを行った革である。しかし昭和40年代より、耐水性と染色性の向上などのために、ホルマリン鞣しを行うようになった。

聖多黙は大きさ3尺5寸に2尺5寸位であり、黄・白・黒の色物がある。紋聖多黙は和製である⁸⁾。モウル革は大きさが3尺平方位である。ウスコウベヤは長さ3尺余に巾2尺余である。新ウスコウベヤは黄色で紋のある和製品である。ベンガラ革は赤・黄・黒の3色で、ハルシアに似ているが、やや小さい。ルソン革は大きさ3尺強の2尺5、6寸で、大きな紋があり、柔らかい。オランダ渡来の革に小豆色の小豆革なるものがあるが、大きさ2間に1間余しとねの大きな革であり、褥などに用いられた。

大阪の文人であった木村兼葎堂（1736～

1802)の収集した皮革類の標本「皮革手鑑」が天理大学付属図書館に収蔵されている(2004.11筆者検分)。「和蘭製革図」と記された台紙には幾つかの革片が貼られており、その横の色紙に「中渡水牛」^{なかわたりにあ}、「中渡阿媽港」^{まかかわ}等と書かれているものもある。その他の標本として、朝鮮虎(毛皮)、支那ハイ鼠(毛皮)、アマカハ、古渡モウル、黄ハルシア、古渡紅革、古渡青地金革、古渡野牛、古渡印度亜、呂宋革、黒サントメ等の外国産の革がある。

鹿皮は甲冑の革所および刀剣の緒、革袴、革足袋、巾着等に用いられていた。武人が好んで革袴や革足袋を用いた。シャム革足袋は柔らかで厚く暖かであるということで賞用された。巾着は武人や庶民が使い、それには染革が用いられた。

鮫皮は刀剣の柄や鞘の装飾に用いられていた^{9, 10, 11)}。柄鮫の名称は鮫の産地名で呼ばれ、最上等級品をチャンペ^{チャンペ}と言ひ、次いでカスタ、サントメと言われた。占城は現在のベトナム中部から南部であり、柬埔寨^{カस्ता}はカンボジアであり、聖多黙はインドのコロマンデル地方である。これらの鮫

皮はアカエイの仲間であり、背中に真珠のような粒々があり、美的にもよく、また握ったときに滑らない。古くは奈良時代の正倉院の「金銀鈿莊唐大刀」^{きんぎんでんかざりのからたち}の柄に用いられている。鮫とエイは板鰓類^{ばんさい}という同じグループに属する軟骨魚類であり、外国産のエイが日本近海で獲れる鮫と同じと思ひ、古くから鮫と称していた。鮫皮は刀の鞘を包むのにも使用された。柄鮫と異なり、産地ではなく、粒や模様によって呼ばれた。梅の花のような大きな粒のあるカイラギザメが最高級であり、梅花皮鮫または花梅華皮と書かれた。この鮫もアカエイの仲間である。鮫皮の上に色漆を塗って装飾した。海子鮫^{うみこさめ}は鮫鞘にするカイラギの腹の方に剥落した粒を巧みに入れ込んで細工したもの(入鮫^{いれざめ})である。

虎皮は馬鞍の飾りや刀剣の尻鞘に用いられたが、日本では産せず、もっぱら中国・朝鮮からのものであり、希少価値があった。そこで虎の毛を他の皮に挿し模造品を製した^{10, 11)}。これを植虎皮^{うえとらのかわ}と称した。尻鞘には豹・熊・鹿等の皮も用いられた。

表4 ラッコ皮の輸出

年 度	数 量	年 度	数 量	年 度	数 量
1785	110	1796	1,420	1811	0
6	70	7	20	2	1,395
7	82	8	0	3	832俵
8	0	9~1800	260	4	1,114俵
9	154	1	718	5	72箱
1790	85	2~3	0	6	1,262俵
1	685	4	3	7	0
2	0	5	255	8	810
3	228	6~9	0	9	236
4	28	1810	1俵, 820	1820	1俵, 50
5	10			1	660

単位：枚。 「唐船輸出入品数量一覧」より作成⁴⁾。

3. 輸出品

「唐船輸出目録（帰帆荷物買渡帳）」に見られる皮としては、まずラッコ皮が挙げられるが、その数量は年度によって大きく異なる（表4）⁴⁾。この目録は1678年（延宝6）からのものが記されており、ラッコの輸出は1763年（宝暦13）に12枚と記載され始め、翌年は44枚となっているが、1784年まではほとんど輸出されていない。その後増加傾向があり、多い年度で、1791年（寛政3）の685枚、1796年（寛政8）の1,420枚、1801年（享和1）の718枚、1812年（文化9）の1,395枚、1818年（文政1）の810枚、1821年（文化4）の660枚がある。なお1814年と1816年に1,114俵と1,262俵とあり、1815年に72箱とある。1俵や1箱に何枚含まれていたかは不明だが、多量には間違いない。1822年（文政5）以降1833年（天保4）まではラッコ皮の輸出は無い。

ラッコは北太平洋に生息し、千島列島近海特に得撫島（別名ラッコ島）に群集していた。蝦夷地の松前藩はアイヌとのラッコ皮の交易を独占しており、大阪や長崎に送っていた。大きさは長さ1間、巾3尺ほどである。1681年（天和1）に狐皮23枚、1761年（宝暦11）にアザラシ皮（数量不明）、1785年（天明5）にカワウソ皮50枚と翌年に熊皮28枚が輸出されている。アザラシは千島列島近海に生息しているので、その皮はラッコ皮同様に蝦夷地から長崎に運ばれた。

「唐蛮貨物帳」によれば、狐皮が1709年（寛永6）の南京船460枚、1710年（寛永7）の普陀山船450枚、南京船810枚、1711年（正徳1）の台湾船1艘360枚、寧波船8艘3,410枚、南京船9艘6,970枚、廈門船1艘149枚がある⁵⁾。さらに1713年（正徳3）の台湾船2艘990枚、寧波船3艘2,430枚、南京船3艘2,170枚がある。

1709～11年頃の狐皮の価格は1枚当り銀9～12匁ほどであったが、ラッコ皮は220匁と極めて高価であった。革製品としては唯一革製煙草入があげられる⁴⁾。1766年（明和3）に乍浦船2艘1箱と200個、1769年（明和6）に乍浦船2艘200個とある。

4. まとめ

江戸前期には鹿や山馬、麂等の皮が年間10万枚を超えるほど多量に輸入されたが、中期にはかなり減少し、後期にはほとんど輸入されなくなった。鮫皮は鹿皮ほどではないが、前期が年度により1万から数万枚とかなり輸入されたが、後期は数千枚と減少した。牛皮は前期には数千から1万枚ほど輸入されたが、後期には輸入されなくなり、それに代わり色革が輸入された。ペルシア革が18世紀初期に合わせて7千枚ほど輸入された。

輸出した皮はラッコ皮と狐皮であった。ラッコ皮は年度によって異なったが、1800年頃の多い年には千枚ほどであった。狐皮は多い年度の1711年と1713年にはそれぞれ4,600枚と5,600枚ほど輸出された。

文 献

- 1) 岩生成一：新版朱印船貿易の研究，吉川弘文館，（1985）P. 288.
- 2) 永積洋子：朱印船，吉川弘文館，（2001）P. 104.
- 3) フランソア・カロン著 幸田成友訳：日本大王国志，5刷，平凡社，（1977）P. 171.
- 4) 永積洋子編：唐船輸出入品数量一覽 1637～1832年，創文社，（1987）P. 37, 253, 330.
- 5) 山脇悌二郎：「唐蛮貨物帳」解題，内閣文庫，（1970）P. 1.
- 6) 山脇悌二郎：長崎の唐人貿易，吉川弘文

- 館, (1964) P. 109.
- 7) 寺島良安：和漢三才図会, 日本庶民生活史料集成 28, 三一書房, (1980) P. 525.
 - 8) 稲葉通龍新右衛門：装剣奇賞 卷之六, 阪府書籍老舗, (1781) P. 1.
 - 9) 矢野憲一：鮫, ものと人間の文化史 25, 6刷, 法政大学出版局, (2001) P. 144.
 - 10) 黒川道祐著 湯浅吉郎編：京都叢書 雍州府志, 京都叢書刊行会, (1916) P. 198.
 - 11) 不明：人倫訓蒙図彙, 東洋文庫 519, 平凡社, (1990) P. 193.